

## 『トピカ』第1巻における protasis と problema の違いについて

高橋祥吾

### はじめに

この論文では、『トピカ』第1巻の中で述べられている protasis と problema に関するアリストテレスの言及を統合的に理解することが目的である。

protasis と problema<sup>1</sup>については、すでに多くの研究者によって言及されていることであるが、この両者に対する解釈は、研究者ごとに少しずつ違いがある。また、Martha Kneale に対する Hadgopoulos のように、Kneale の解釈を誤りとして明確に対立の立場を示す研究者もいる。しかし、実際は、研究者の間の解釈の相違は、必ずしもすべてが対立するようなものではないように見える。解釈の相違は、むしろアリストテレス自身が protasis と problema について語る時、語る観点、視点を変えていることに原因がある。例えば、第1巻の4章で、語り方以外には違いはないと言われる、protasis と problema だが、同巻10章と11章では、protasis と problema のそれぞれの特徴を挙げている。10章と11章では、4章で同じと言われたはずの両者には明らかな違いがあるように見える。しかし以上のことは、protasis と problema について、それぞれ異なる観点で述べたために、同じであると言われたり、違いが述べられていると考えるならば、特に問題はないと考えられる。

そこで本論では、先に挙げた Martha Kneale や Hadgopoulos をはじめ、その他の研究者たち

<sup>1</sup>本論では、基本的に protasis と problema の訳語を保留する。ただし、引用の際に限り、protasis に「提言」、problema に「問題」という訳語を当てる。

の解釈を見ながら、彼等の解釈が、「観点の違い」として包括的にまとめられるのか、あるいは別の方法で説明できるのかを吟味し、そしてその結果として、protasis と problema の関係とその問題点を明らかにする。

### 代表的先行解釈について

さて、まずはじめに、解釈者たちの中で、Martha Kneale と Hadgopoulos の解釈を概略的にまとめて、示すことにする。というのは、この二人の解釈が比較的時期的に早く、またその後に出てきた解釈の基本的な部分は押さえていると思われるからである。それでは、Martha Kneale の説明から見ることにする。彼女の解説をまとめると、次のようになるだろう(p.34-35)。

1. 『トピカ』において、両者は共に問いであり、両者の違いは単に形式(form)だけである。この形式の違いは重要である。
2. なぜなら、両者の形式の違いは、protasis が議論の出発点において与えられ、他方で、problema が議論を続けてゆく時に与えられるということに由来すると考えられる。
3. 『分析論前書』では、protasis は、statement として表れている。problema も、同じく statement として意味されているように見える<sup>2</sup>。
4. 語源的な観点からも、以上の見解は弁護されうる。protasis は、προτείνω (to hold forth or offer) に由来する語であるから、議論の最初に提示されるものと言うことができる。他方の problema も、προβάλλω (to throw forward or down) か

<sup>2</sup>『分析論前書』に関わる事柄は、本論では扱わない。

ら由来するもので、議論の途中に投げ出されたもの、つまり提案である。

次に、これに対して異義を唱えた Hadgopoulos の主張も見てみることにしよう (pp. 267-271; 275)。

1. protasis は、推論の前提として機能し, problema は、議論において破壊されたり擁護されたりするものとして機能する。

2. Kneale の説明にある、形式の違いは重要な違いではない。

3. Kneale の主張に反して、『トピカ』の中で protasis や problema は statement として用いられている箇所がある。また『分析論前書』でも問いとして用いられている箇所がある。故に、Kneale の主張は間違っている。

さて、Hadgopoulos のこの批判に関しては、細かい点は除き、彼の主要な主張は正しい批判であると、Slomkowski は判断している (p. 21 n. 60)。実際、Kneale は、『トピカ』での protasis と problema の特徴を説明いとは言い難い。では、protasis と problema は、どこが違う、どこが同じであるのだろうか。以下では、Hadgopoulos 等の解釈を踏まえつつ、アリストテレスが protasis と problema について説明している主要な箇所を取り上げる。

#### 4 章での protasis と problema

アリストテレスは、第1巻4章で、protasis と problema は同じだと言う。他方で、10章と11章でそれぞれの特徴を述べる。しかし、4章で述べられていることと、10章と11章で述べられていることは、齟齬があるように見える。まず4章は、protasis と problema が同じであると言っているように見える。4章は、とりあえず、いくつかの部分に分けることができるが、そのうち4章の冒頭で、アリストテレスは次のように言う。

ゆえに、はじめに見るべきなのは、方法が何に基づいているのかということである。たしかに、もし我々が、諸議論 (λόγοι) がどれだけの数 (πόσα) の、そしてどのような種類 (ποιῶν) のものに対してあるのか、また何に基づいて (ἐκ τίνων) あるのかを把握したならば、そしてどのようにして我々がそれらを数多く持ちうるかを把握したならば、我々は提示されている主題を十分に理

解するだろう。そして、諸議論が基づいているところのものと、推論がそれについてあるところのものは、数において等しく、同じものである。というのは、一方で、諸議論は「提言 (protasis)」に基づいているし、他方で推論がそれについてあるところのものは、「問題 (problema)」であるから。(101b11-16)<sup>3</sup>

Πρῶτον οὖν θεωρητέον ἐκ τίνων ἢ μέθοδος. εἰ δὴ λάβοιμεν πρὸς πόσα καὶ ποῖα καὶ ἐκ τίνων οἱ λόγοι, καὶ πῶς τούτων εὐπορήσομεν, ἔχοιμεν ἂν ἱκανῶς τὸ προκειμένον. ἔστι δ' ἀριθμῶ ἴσα καὶ τὰ αὐτὰ ἐξ ὧν τε οἱ λόγοι καὶ περὶ ὧν οἱ συλλογισμοί. γίνονται μὲν γὰρ οἱ λόγοι ἐκ τῶν προτάσεων· περὶ ὧν δὲ οἱ συλλογισμοί, τὰ προβλήματα ἔστι.

この箇所では、「諸議論が基づいているところのもの」と「推論がそれについてあるところのもの」は、同数で同じであると言われている。そして、「諸議論が基づいているところのもの」とは、protasis であり、「推論がそれについてあるところのもの」とは problema である。ゆえに、protasis と problema は同じものであると言えるだろう。さて、この箇所について Hadgopoulos は、ἐκ τῶν προτάσεων というのは、その前の「何に基づいているのか ἐκ τίνων」という問いに対する答であり、τὰ προβλήματα ἔστι は、πρὸς ποῖα οἱ λόγοι あるいは、περὶ τίνων οἱ συλλογισμοί に対する答であると言う (p. 267)。この箇所では何が語られているのかについては、多くの注釈がある。それらの解釈は後で見ると、ともかく Hadgopoulos は、これらの答から、protasis は「logos がそれらから成り立つもの」であり、problema は、それらをめぐって logos あるいは syllogismoi が組み立てられるところのものであることは明らかであると述べる。protasis と problema は推論での機能の点で区別されると言われる。その結果として彼は、protasis は、推論の前提として機能し、problema は、議論において破壊されたり擁護されたりするものとして機能すると述べる (p. 267)。しかしながら、Hadgopoulos は上記のアリストテレスの発言で、

<sup>3</sup>引用は、特に書名を示さない限りすべて『トピカ』からの引用である。ページ付けはベッカー版に従い、底本は、Ross, W. D. (1958), *Aristotelis Topica et Sophistici Elenchi*, Oxford Classical Texts, Oxford: Clarendon Press. である。Ross に従わない場合は、注で示す。また、訳は拙訳である。

protasis と problema が同じであるという部分を無視しているように見える。Hadgopoulos の解釈では、推論において前提として機能するものと、破壊されたり弁護されたりするものが同じだということになる。彼は、πρὸς ποῖα οἱ λόγοι と、περὶ τίνων οἱ συλλογισμοί を同じように扱うが、なぜ同じであると言えるのだろうか。この点に難点が残るが、それを明確に説明していない。他方で、Smith は、Kneale と同じように、protasis と problema が動詞から派生してきた語であることを指摘し、問答法の文脈では、problema が議論の主題 (subject) であり、問い手が攻撃しようと企て、答え手が弁護しようと企てるものであると説明する。他方で、protasis は、質問者によって応答者に対して提示された質問であり、このような質問の提示の目的は推論を構築するための材料を確保するためであると、Smith は説明する。そして Smith は、protasis と problema は、使用法の違う命題 (proposition) であり、protasis は問いの形で応答者に提示される命題で、problema は、質問者と答え手の間の見解の不一致の主題となっている命題のことであるとまとめる (pp. 56-7)。次に、アレクサンドロスの解釈を見てみよう。アレクサンドロスによれば (pp. 34-35), 「議論 (λόγος) がどれだけの数の、そしてどのような種類ものものに対してあるのか」という問いは「問答法の問題の類がどれだけの数あり、何であるか」という問いであるということになる。なぜなら、「あらかじめ置かれている何らかの問題について、問答法家は議論を動かし、推論を作るからである」(p. 34; l. 25-6)。議論を進め、推論を構築するためには、そもそも何についての議論、推論であるかを知らなければならないのである。他方で、protasis の方はどうであろうか。ἐκ τίνων という問いは、確かに protasis に関するものであるが、この問は、「どれだけの数の、何に基づいているか」ということを言っていると、アレクサンドロスは解釈する (p. 34; l. 28-9)。さらにアレクサンドロスは、この箇所で行われている λόγος と συλλογισμός の関係を、συλλογισμός が λόγος に含まれる関係と見

ているようである<sup>4</sup>。したがって、Hadgopoulos の解釈で残っていた疑問、すなわち πρὸς ποῖα οἱ λόγοι と περὶ τίνων οἱ συλλογισμοί がなぜ同じものと見なせるのかという疑問は、λόγος が συλλογισμός を含むのだと解釈することで解消されうる。しかし、アレクサンドロスは、εἰ δὴ λάβοιμεν πρὸς πόσα καὶ ποῖα καὶ ἐκ τίνων οἱ λόγοι という部分が、どのような意味で解釈できるか、複数の解釈の可能性を指摘する (p. 36)。それは、広く一般的な意味で、logos が用いられているとも言われたり、問答法的な意味であると言われたりと、いかようにも解釈できるのである。しかし、アレクサンドロス自身は、それらの解釈の可能性の中で、この4章の protasis と problema を、問答法的なそれであると解釈して説明しているようである<sup>5</sup>。

以上の解釈を踏まえ、この箇所の protasis と problema を理解するには、4章の構成がどのようになっているのかを考える必要があるだろう<sup>6</sup>。問題となるのは、はじめに述べられている問題提起が、どう答えられているのかという点である。アリストテレスは、冒頭に大きな問題提起、「方法が何に基づいているのか」という問いを立て、さらにそれを分けて「諸議論 (λόγοι) がどれだけの数 (πόσα) の、そしてどのような種類 (ποῖα) のものに対してあるのか」「諸議論が何に基づいて (ἐκ τίνων) あるのか」、「どのようにして我々がそれらを数多く持ちうるか」という問いにする。最後の「どのようにして我々がそれらを数多く持ちうるか」という問いに対する応答は、101b17 以降、protasis と problema が定義、類、固有性、付帯性の四つのいずれかを明らかにし、両者は、表現形式に違いがあるのみで変換可能であることが述べられることで答えられていると思われる (Cf. Zadro, p. 317; Smith, p. 57)。そして、その前の二つの問いは protasis と problema に関係している。二

<sup>4</sup>Zadro も同様の見解を述べる。(Zadro, p. 317)

<sup>5</sup>Tricot もまた、この箇所で述べられていることは、すべて問答法的な logos および、推論であると解釈しているようである。彼は、この箇所の logos を les arguments dialectiques と訳している (p. 7-8)。

<sup>6</sup>定義と固有性は、広義の固有性としてははじめは述べられているが、101b19-23 で区別される。

つの問いは、Hadgpoulos やアレクサンドロスの解釈に見られるように、「諸議論がどれだけの数の、そしてどのような種類のものに対してあるのか」に対する返答は、*problema* について、つまり「推論がそれについてあるところのもの」と、「諸議論が何に基づいているのか」という問いに対しては、「諸議論に基づいているところのもの」、つまり *protasis* に基づいていると返答することになる。この「諸議論に基づいているもの」と「議論がそれについてあるもの」が同じ数で同じものだと言われていた。しかし、議論に基づいているということは、議論の構成要素として機能することであり、議論についてあるとは、それを主題として議論が行なわれるということである。したがって、この二つの機能が同じということはないだろう。*protasis* と *problema* が同じであるとされるのは、その機能が理由ではないということである。では、いかなる理由で同じであると言われるのか。

#### 表現形式について

101b16 まででは、*protasis* と *problema* が同じであるとは言われていたが、同じである根拠は明らかではなかった。しかし、アリストテレスはすぐ後で「そして、あらゆる提言とあらゆる問題は、固有性か、類か、付帯性を明らかにする(101b18-9)」と言う。したがって、*protasis* と *problema* は共に、定義か固有性か、類か、付帯性のいずれかを明らかにする、という点で共通しているとわかる<sup>7</sup>。定義や類は、*protasis* や *problema* の構成要素と言うべき役割を担っている(101b26-28)。Brunschwig は、*protasis* や *problema* の数が同じであると言われるのは、この定義や類などの数が同じであるということなのだとして解釈する(pp. 118-119; 121)。*protasis* と *problema* が同じであると見なされるのは、本当に Brunschwig が解釈する通りなのか。そして、同じであると言われる中で表現形式は異なっているとされるが、その表現形式はどのような役割を持つと考えられるのだろうか。以下ではこの点に関して、表現形式の違いを中心に考察することにしたい。さて、Kneale が重要である

<sup>7</sup>定義と固有性は、広義の固有性としてはじめは述べられているが、101b19-23 で区別される。

と見なしていた、表現形式の違いについて、アリストテレスは次のように言っている。

そして、問題と提言は、その表現の形式において異なっている。一方で、「『二足歩行の動物』は『人間』の定義であるか」や、「『動物』は『人間』の類であるのか」というように述べられるとき、提言が生じる。他方で、「『二足歩行の動物』は『人間』の定義であるか、否か」と述べられるならば、問題が生じるのである。そして、他の場合も同様である。したがって、諸問題と諸提言は、数において等しい。というのも君は、表現の形式を変えることで、あらゆる提言から問題を作るだろうからである。(101b28-36)

διαφέρει δὲ τὸ πρόβλημα καὶ ἡ πρότασις τῷ τρόπῳ. οὕτω μὲν γὰρ ῥηθέντος, “ἄρα γε τὸ ζῶον πεζὸν δίπουν ὁρισμὸς ἐστὶν ἀνθρώπου;” καὶ “ἄρα γε τὸ ζῶον γένος τοῦ ἀνθρώπου;”, πρότασις γίνεται· ἐὰν δὲ “πότερον τὸ ζῶον πεζὸν δίπουν ὁρισμὸς ἐστὶν ἀνθρώπου ἢ οὐ;”, πρόβλημα γίνεται· ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων. ὥστ’ εἰκότως ἴσα τῷ ἀριθμῷ τὰ προβλήματα καὶ αἱ προτάσεις εἰσὶν ἀπὸ πάσης γὰρ προτάσεως πρόβλημα ποιήσεις μεταβάλλων τῷ τρόπῳ.

ここで述べられている *protasis* と *problema* の表現形式の例外を、Hadgpoulos は指摘する。105b23-25 では、*protasis* の例として、*problema* の表現形式が用いられているのである。しかしながら、例外は、この一例だけであり、Slomkowski が言うように(pp. 21-22)、この例外をあまり強調しすぎるべきではないと思われる。この点について Slomkowski は、105b23-25 でのアリストテレスは明らかに *inattentive* だと言う(p. 23)。しかし、*inattentive* であるということは、表現形式がそこまで重要でないということでもあるのではないだろうか。

Brunschwig は、*problema* と *protasis* が同数で同じであると言われているのは、タイプが同数であるということであり、*protasis* と *problema* それ自体が同数であるということではない、と解釈する(p.121)。このタイプとは、述語付けられるものの種類(いわゆるプレディカピリア)、すなわち定義、固有性、類、付帯性のことであり、つまり数は四つということになる。もし *protasis* と *problema* 自体の数が同じであると考える場合、この2つの総体は無数にあり、同

じであることは、それぞれの要素内の単語ごとの一一致を確かめることで証明することになる。

しかし、アレクサンドロスは「protasis と problema が同じものどもを明らかにするもので、同じものどもの中にあるならば、…」(p. 37) と言っているように、意味内容が同じであることから、protasis と problema が同じ数あることを結論しているように思われる。この時、アレクサンドロスはプレディカビリアのことを考慮していない。それゆえ彼は単純に、個々の protasis と problema の数が同一と考えていると思われる。実際、101b36 で「したがって、諸問題と諸提言は、数において等しい。というのも、君は、形式を変えることで、あらゆる提言から問題を作るだろうからである」とアリストテレスが述べる時、個々の protasis と problema について考えている。

protasis と problema が同じであると言われるのは、Smith が指摘したように、protasis と problema が両方とも proposition であるということに基づいていると思われる (p. 57)。両者は、同じある命題から、問答法的な状況に応じて、protasis となったり、problema になったりする。したがって、もともとひとつのものが状況に応じて2つに分かれたと考えるべきである。しかし、protasis と problema の違いが問答法での使用の状況に依存していることと、その表現形式の違いにどのような関連が見い出されるのだろうか。Smith は、protasis が yes-no で答えられる問いであることが要求されるため、その質問の形式は ἀρά γε という形になると言う。それに対して、problema は、肯定的にか否定的にか、問いを解くためのものであり、問いとしては、肯定と否定の両面を持つものであると考える。したがって、そのような問いの形式は πότερον で表されるものである (p.59)。ただし問いの語尾に付いている、ἢ οὐ (or not) は、形式に必然的な要素ではない<sup>8</sup>。したがって明らかに、この Smith の解釈は、Kneale のそれと類似のものであろう。

しかし、問答をする状況下での protasis と pro-

blema の違いが、表現形式に影響を与えているという明確な説明はないように思われる。実際のところ、Smith や Martha Kneale の説明を正当化するようなアリストテレス自身の説明は見受けられない。語源的な説明を Kneale と Smith が加えるのも、根拠の脆弱さを補強するためであるように見える。protasis と problema の問答法での役割の違いが、必然的に表現形式を決定するとしたら、Hadgopoulos の指摘するような例外は決して生じないのではないか。文脈上、表現形式と特徴の繋がりが無い場面であったとしても、混同は生じないのではないだろうか。

### 10 章と 11 章の protasis と problema

さて、問答を行なう状況に伴う protasis と problema の特徴は、10 章と 11 章で述べられている。これらの章では、protasis と problema が対比的に取り上げられている。protasis と problema が問答の状況によって区別されることがより明確に語られていると思われるが、ここでの言及は 4 章で語られていることと関係付けることができるのだろうか。まずは、アリストテレスがどのように言っているかを見てみることにしたい。

そして、問答法的提言は、あらゆる人にか、もっとも多くの人々にか、知者たちに (すなわち、彼等のすべてにか、もっとも多くにか、もっとも有名な者たちに) 受け入れられる事柄 (矛盾を含むものでない限りで) を問うたものである。というのは、多くの人々の見解に反対でないならば、知者達に思われているものを人は立てるからである。そして、問答法的諸提言は、受け入れられている見解に似たものでもあり、受け入れられている見解であると思われる思われているものと反対のものでもあり、対立する言明に従って提言されるものでもあり、見い出されている技術知に則している見解であるものである。(104a8-15)

ἔστι δὲ πρότασις διαλεκτικῆ ἐρώτησις ἐνδοξος ἢ πᾶσιν ἢ τοῖς πλείστοις ἢ τοῖς σοφοῖς, καὶ τούτοις ἢ πᾶσιν ἢ τοῖς πλείστοις ἢ τοῖς μάλιστα γνωρίμοις, μὴ παράδοξος· θείη γὰρ ἂν τις τὸ δοκοῦν τοῖς σοφοῖς, ἐὰν μὴ ἐναντίον ταῖς τῶν πολλῶν δόξαις ἤ. εἰσὶ δὲ προτάσεις διαλεκτικαὶ καὶ τὰ τοῖς ἐνδόξοις ὅμοια, καὶ τὰναντία τοῖς δοκοῦσιν ἐνδόξοις εἶναι, κατ' ἀντίφασιν προτεινόμενα, καὶ ὅσαι

<sup>8</sup>Cf. Alexander, p. 37; Smith, p. 59.

δόξαι κατὰ τέχνας εἰσι τὰς εὐρημένας.

この説明に見られる、protasis の特徴は、多くの人にか、知者にか、受け入れられているということである。protasis は、矛盾対立する二つの命題の片方を、問いの形で提出したものである。『分析論前書』でも類似のことが述べられている(24a25)。また、『命題論』では次のように述べられている箇所がある。

だから、もし問答法で使われる問いが、提言への返答であれ、対立関係にある命題の片方の部分への返答であれ、返答の要求であるなら、とはいえず提言は対立している命題の一つの部分なのであるが、それ(「ソクラテスは白い歩く人」のような種類の命題を用いた問答法での問い)に対する返答は一つではないだろう。というのは、質問も一つではなく、答えも、仮に真であるとしても、一つではないからである。しかし、これらについては『トピカ』の中で語られた。そして同時に明らかなのは、「何であるか」も問答法で用いられる問いではないということである。というのも、対立関係にある命題の部分のいずれかを表明しようとして選択することが、問いから与えられなければならないからである。そこで、問う人は「人間はこれこれであるか、あるいはそうでないか」と問いを定めなければならないのである。(De int. 20b22-30 括弧内は筆者による挿入)

εἰ οὖν ἡ ἐρώτησις ἡ διαλεκτικὴ ἀποκρίσεώς ἐστιν αἴτησις, ἢ τῆς προτάσεως ἢ θατέρου μορίου τῆς ἀντιφάσεως, ἢ δὲ πρότασις ἀντιφάσεως μιᾶς μόριον, οὐκ ἂν εἴη μία ἀπόκρισις πρὸς ταῦτα· οὐδὲ γὰρ ἡ ἐρώτησις μία, οὐδ' ἂν ἡ ἀληθής. εἴρηται δὲ ἐν τοῖς Τοπικοῖς περὶ αὐτῶν. ἅμα δὲ δῆλον ὅτι οὐδὲ τὸ τί ἐστὶν ἐρωτήσεως ἐστὶ διαλεκτικὴ· δεῖ γὰρ δεδόσθαι ἐκ τῆς ἐρωτήσεως ἐλέσθαι ὁπότερον βούλεται τῆς ἀντιφάσεως μόριον ἀποφύνασθαι. ἀλλὰ δεῖ τὸν ἐρωτῶντα προσδιορίσαι πότερον τόδε ἐστὶν ὁ ἄνθρωπος ἢ οὐ τοῦτο.

この箇所では、protasis が、「対立している命題の一つの部分」と言われている。そして、「何であるか」という問いは、問答法の問いとしては相応しくないことも述べられている。この点は、『トピカ』の第8巻でも類似の記述がある(Cf. 158a14-21)。問答法で用いられるべき問いは、Yes か No で答えられなければならない。そして、そのような答は、質問が矛盾対立する組

み合わせに基づいていることで可能となる。その理由を Whitaker は、「なぜなら、問答法的問いに答えることは、二つの矛盾対立する主張の一方を真として選び、もう一方を偽として拒否することであるから」と言う(p. 180)。そのため、問い手によって矛盾対立する命題の片方で形成された問いは、答え手によって否定された場合、必然的に否定された命題に矛盾対立するもう片方の命題が真として受け入れられるということになる。

さて、上記の『命題論』の引用の最後で、問いは、「A は B であるか、あるいはそうでないか」という形で例示されている。この問いの形式は『トピカ』では problema であるが、この箇所では言及されているのは protasis のみである。それゆえ、Hadgopoulos は、この箇所もまた、アリストテレスが問いの形式にこだわっていないことを示すものである根拠としている。ここにも、形式との関係の希薄さが感じられる。

さて、以上の protasis の説明に対して、problema は次のように説明される。

そして、問答法的問題は、それ自体であれ、このような種類のものうちの何か他のもの(解決の)為に共に働くものとしてであれ、選択と拒否へ、あるいは真実と認識(知識)へと向ける思索(考察の対象)である。それについて、どちらの仕方でも見解を持たないこともあれば、多くの人々が知者達に反対の仕方で見解を持ったり、知者達が多くの人々に反対の仕方で見解を持ったり、両方の人達自身が自分達に反対の仕方で見解を持つことがある。(104b1-5)

Πρόβλημα δ' ἐστὶ διαλεκτικὸν θεώρημα τὸ συντεῖνον ἢ πρὸς αἴρεσιν καὶ φυγὴν ἢ πρὸς ἀλήθειαν καὶ γνῶσιν, ἢ αὐτὸ ἢ ὡς συνεργὸν πρὸς τι ἕτερον τῶν τοιούτων, περὶ οὗ ἢ οὐδετέρως δοξάζουσιν ἢ ἐναντίως οἱ πολλοὶ τοῖς σοφοῖς ἢ οἱ σοφοὶ τοῖς πολλοῖς ἢ ἐκάτεροι αὐτοὶ ἑαυτοῖς.

それらの事柄についての推論が反対であるような、その事柄も(問答法的な)問題である。(というのは、何かかそうであるのか、ないのかという難問を持つのは、両方について説得力のある議論が存在する故にであるから。また、その事柄についての議論を、その事柄(の範囲)が大きいので、我々が持つことができないような、その事柄も(問答法的な)問題である。それは我々が、何ゆえに(そうであるかという理由)を与えることが困難であると思つてのことである。例えば、宇宙は永遠であるか、否かと

いう場合のように。というのも、人はそういう類いのものどもも、探究しうるだろうからである。(104b12-17)

ἔστι δὲ προβλήματα καὶ ὧν ἐναντίοι εἰσὶ συλλογισμοὶ (ἀπορίαν γὰρ ἔχει πότερον οὕτως ἔχει ἢ οὐχ οὕτως, διὰ τὸ περὶ ἀμφοτέρων εἶναι λόγους πιθανούς), καὶ περὶ ὧν λόγον μὴ ἔχομεν, ὄντων μεγάλων, χαλεπὸν οἰόμενοι εἶναι τὸ διὰ τί ἀποδοῦναι, οἷον πότερον ὁ κόσμος αἰδῖος ἢ οὐ· καὶ γὰρ τὰ τοιαῦτα ζητήσκειν ἄν τις.

以上から、problema が持つ大きな特徴は、何らかの困難、アポリアを持っているということである。protasis は、多くの人に受け入れられる、ἐνδοξα であった。しかし、problema の方は、多くの人達が受け入れることのできないものであろう。何か疑わしさを持っていたり、内容が漠然としていたり、検証し難いようなものであったりと、多くの人に、受け入れ難いものなのである。この点で problema は、明らかに protasis と対立している。protasis と problema は、以上のような対立的な内容を持っている。しかし4章では、protasis と problema が表現を変えることで、変換可能だとされていた。では、同じ意味内容を持つ protasis と problema は、表現の違いに左右されて、一方は acceptable で、他方は problematic であるということなのだろうか。それは考えにくいことだろう。なぜなら、表現上の違いと、acceptable か problematic かの違いの関連性は明らかでないからである。むしろ、問答法的な protasis と problema の特徴を説明しはじめの10章の冒頭に、両者の関係を読み解く鍵があるように思う。10章の冒頭は次のようになっている。

だからはじめに、問答法的提言とは何か、そして問答法的問題とは何かを規定することにしよう。というのは、あらゆる提言を、問答法的なものだと見なすべきでなく、すべての問題も問答法的なものに見なすべきではないからである。というのは、いかなる人も、誰にもそう思われないことに考慮して、提言を与えたりしないし、あらゆる人に、あるいは最も多くのひとたちに明白なものを問題にしたりもしないからである。なぜなら、一方の問題にはアポリア(困難)はないし、他方の提言を、誰も立てはしないだろうから。(104a3-8)

Πρῶτον τοίνυν διωρίσθω τί ἐστὶ πρότασις διαλεκτικῆ καὶ τί πρόβλημα διαλεκτικόν. οὐ γὰρ πᾶσαν πρότασιν οὐδὲ πᾶν πρόβλημα διαλεκτικὸν θετέον· οὐδεὶς γὰρ ἂν προτεινείη νοῦν ἔχων τὸ μηδενὶ δοκοῦν οὐδὲ προβάλοι τὸ πᾶσι φανερόν ἢ τοῖς πλείστοις· τὰ μὲν γὰρ οὐκ ἔχει ἀπορίαν, τὰ δ' οὐδεὶς ἂν θείη.

ここでは、あらゆる protasis と problema が、問答法で用いられるものであるわけではないことが述べられている。注目すべきは、誰にも受け入れられないことを、protasis として提示することもなければ、皆に明らかなことを problema として提示することもないという説明である。全員に明らかである場合は、もはや ἐνδοξα なものではなく、problema を作ることはできない。なぜなら、そこに何らかのアポリアは存在しないからである。逆に、誰にも受け入れられないものを protasis とすることはできない。なぜなら、まったく受け入れられないものを提示する人は居ないからである。

従って、全く明らかな場合と全く受け入れられない場合を、両端と考えるなら、その中間に状況に protasis と problema は成立すると言えるだろう。

問答法において、問い手が多くの人に(あるいは知者に)受け入れられる見解を protasis として問いを発する場合に、答え手がそれを拒否するとする。このとき、protasis は、Yes か No で答えられる問いであり、矛盾対立する二つの言明の一方であるから、答え手が protasis を拒否するということは、矛盾対立する言明のもう片方を肯定することに繋がる。そしてさらに、問い手が提示した protasis は、受け入れられている見解であったから、その見解に矛盾対立するような見解(言明)は、多くの人々の思われに対立するものであるだろう。そして、そのような人々の考えに対立する見解は、problema であったのである。

それゆえ、次のようにも言えるだろう。すなわち、誰にも受け入れられないことは、problema にならないし、全員に明らかなことを protasis にすることはできないということである。これは、単純に両者が変換可能であるから、入れ替

えても成り立つということではない。というのは、誰にも受け入れられないということは、明らかにその見解が誤りであると見なされているということであり、全員に明らかであるということは、その見解の否定は、誰にも受け入れられないということであるからである。したがって、問答法の場面では、全員に明らかでないが、誰にも受け入れられないわけではない見解が吟味されることになるのである。

10章と11章で語られる、protasisとproblemaの違いは、問答の現場で生じるものである。問い手によって提出されたprotasisが、答え手によって拒否された時、problemaが生じる。protasisは多くの人、あるいは知者に受け入れられるものであったが、それが拒否されるということは、提出されたprotasisと矛盾対立関係にある命題が答え手には受け入れられるものとある。その結果として、その矛盾対立関係にある命題は、多くの人に、あるいは知者には受け入れ難いものとなるであろう。そして、多くの人々の考え、あるいは知者の考えに対立するようものとは、problemaのことであった。したがって、問答の現場で、protasisの拒否はproblemaを生むとすることができる。逆に、protasisとproblemaは、問答の場という限定を取り除いた場合、両者を区別する特徴を失うと言えるだろう。

それに対して、4章でのprotasisとproblemaの記述は、その主たる要点は、問答の場に際した特徴を述べることにではなく、両方に共通する事柄を述べることである。そのため、4章の記述に10章や11章の記述は影響を与えないと思われるし、その逆もまた同様である。それぞれの内容は独立して理解されるべきである。それは、4章で述べられているprotasisとproblemaが同じであると言われる根拠が、問答法の使用の現場、問い手や答え手、あるいは人々の命題に対する評価とは無関係であるからである。protasisとproblemaが同じであるというのは、protasisもproblemaも、意味内容が同じであるということであり、その意味内容が受け入れられるものであるかどうかということは、ある意味で外的な要素となっている。なぜなら、命題そのものが示す意味内容が同じであって

も、acceptableと見なされるならばprotasisに、problematicであると見なされたならproblemaとなるのだから、その命題にとって、protasisとproblemaのそれぞれの特徴は生じたり、滅したりするような外的な、あるいは付帯的なものだろうからである。ただし、問答法において命題はprotasisかproblemaのどちらかとして表れるのであるから、問答法という限定の中では、外的な特徴とは言えないだろう。現実にはprotasisかproblemaとして表れるのであるから、それぞれの特徴を切り離すことはできない。

### 結論

以上から、protasisとproblemaの違いはおおよそ明らかである。端的には、protasisはacceptableなものであり、problemaはproblematicなものであると言えるだろう。しかしこの特徴は、問答を行う状況下ではじめて表れるものである。そのため、問答を行う状況を考慮せずに、protasisとproblemaをそれ自体で見ると、その違いは表現形式だけしか見出せないことになる。しかし、それぞれの表現形式が、問答を行う時に与えられる特徴とどのような関係を持つのか明らかではない。なぜなら、protasisが議論を構成するものとして機能したり、acceptableなものであることが、どのようにしてἀρά γε...という問いの表現と関係しているのか、アリストテレスは語っていないからである。むしろ、これらの関係が薄いからこそ、表現形式の違いは、問答の状況を考慮することなくprotasisとproblemaを区別する基準となり得るのかもしれない

少なくとも、protasisとproblemaはそれぞれに、決まった表現形式と二種類の内容が与えられていると言える。つまり、表現形式と、問答を行なう人によって与えられる評価的内容、そして形式や評価に関係ない命題自体が示す意味内容である。そして、命題が持つ意味内容に対して与えられる評価がprotasisか、problemaであるかを分け、さらに問答を行なうに適した表現形式を与えられて問いになると考えられるのである。

文献

- Alexander of Aphrodisias (1891), *In Aristotelis Topi-  
corum Libros Octo Commentaria* (CIAG, II.2, ed.  
M. Wallies).
- Brunschwig, J. (1967), *Aristote, Topiques I-IV*, Paris:  
Éditions 'Les Belles Lettres'.
- Hadgopoulos, D. J. (1976), "Protasis and Problêma in  
the Topics", *Phronesis* 21, 266-276.
- Kneale, W. and M. (1984, 1962), *The Development of  
Logic*, Oxford: Clarendon Press.
- Ross, W. D. (1958), *Aristotelis Topica et Sophistici  
Elenchi*, Oxford Classical Texts, Oxford: Clarendon  
Press.
- Slomkowski, P. (1997), *Aristotle's Topics*, Leiden:  
Brill.
- Smith, R. (1997), *Aristotle Topics Book I and VIII*, Ox-  
ford: Clarendon Press.
- Tricot, J. (1965), *Aristote: Organon*, (V: Les Top-  
iques), Paris: J. Vrin.
- Wallies, M. (1923), *Aristotelis Topica cum libro de So-  
phisticis Elenchis*, Leipzig: Teubner.
- Whitaker, C. W. A. (1996), *Aristotle's De interpreta-  
tione*, Oxford: Clarendon Press.
- Zadro, A. (1974), *Aristotele, I topici*, Loffredo,  
Napoli: Loffredo.

(たかはし しょうご, 広島大学大学院  
文学研究科博士課程後期 [哲学])